

II 特別連載 II

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第304回

新型コロナウイルスの感染拡大の影響による海外からの渡航制限のため、さくらサイエンスプログラムでも招へいが実施できない状況が続いている。科学技術振興機構(JST)では、これまでの交流により醸成された海外の送出し機関と日本の受入れ機関の良好な関係を継続させるため、また新たな交流に向けた準備のために、各機関によるオンラインプログラムへの支援を続けている。今回は福岡大学が実施したプログラムと、さくらサイエンスプログラムの同窓会組織である、さくらサイエンスクラブ(SC)のネパール同窓会について報告する。

福岡大学の活動報告



三島 健司
(福岡大学国際センター長)

オンライン交流プログラム

最先端の環境技術を学ぶ

2022年3月1日～2日、福岡大学とカーティン大学(オーストラリア)、セブローベンパー工科大学、ラジャアリハジ海事大



海水淡水化技術の講義

学、イスラム大学マラン校(いずれもインドネシア)の教職員や学生が参加し、さくらサイエンスプログラム代替オンライン交流プログラムが開催された。新型コロナウイルスの影響により、予定していた対面形式からオンライン形式に切り替え、テーマを「環境技術」とした本交流では、両日とも、参加者が60名を超えた。

初日、主担当者ならびに参加大学の責任者の先生方による挨拶に続き、本学の三島健司教授、鈴木慎也准教授から、「海水から淡水製造」「ごみ処理技術」など環境技術に関する講義が行われた。

講義では、福岡市や福岡大学が誇る最先端の環境技術を海外の教員や学生へ現場の動画なども交えて分かりやすく解説した。福岡大学では福岡市と共同で「福岡方式」という準好気性埋立ごみ処理方法を確立し、世界に向けてその技術を広めている。深刻な水不足を経験した福岡市には、巨大な海水淡水化処理施設があり、講義ではこの施設でも実用化されている高分子中空糸膜を用いた逆浸透法について、世界の水事情を踏まえた科学技術的解説があった。

講義終了後には、教員や学生から、口頭やチャットのコメント欄を用いた活発な質疑応答が展開され、質問者の環境技術に対する理解がさらに深まった。環境技術に関する講演前講演後(事前事後)アンケートでは、次の10項目「①異常気象、②あなたの国の政府の水供給政策、③海水から淡水を作る技術、④二酸化炭素と地球温暖化、⑤二酸化炭素の有効利用技術、⑥プラスチックごみの処理、⑦あなたの国の政府のごみ処理政策、⑧ごみリサイクル技術、⑨材料の有効利用、⑩日本のごみ問題の過去と現在の歴史」への興味の違いを5段階で評価した(最も興味深いのが「5」興味が高いが「1」)。アンケートの結果、平均値で講義前が3.73であり、講義後が4.36であった。環境技術にもともと興味が高い学生が参加していたが、講義後、さらにその興味が高まったことがわかる。

1日目午後と2日目、海外の高校生、大学生の発表審査を実施した。インドネシアの水事情、マンダロブリン減少、オーストラリアの山火事といった各国の実情を反映した環境に関する優れた発表が多かった。発表後の質疑応答が活発であったことから、このプログラムの目的が達成されたと考えられる。最後に、参加大学の教員たちによる投票で優秀者を選出し、表彰した。

プログラム参加者を対象とした事後アンケートでは、プログラムの満足度が高いとの評価

をいただいた。今後、国際共同研究に発展する研究者レベルの交流が期待される。

さくらサイエンスプログラム

ネパール同窓会 第1回会合、ウェビナーで開催

科学技術振興機構(JST)

科学技術振興機構(JST)とネパール同窓会の共催で、4月16日に「Promotion of Friendship between Nepal and Japan」ウェビナーが53名の参加者により、オンラインで開催された。写真は、本同窓会が2022年1月に設立(幹事長と幹事の組織化)された後、最初の同窓会会合となるもので、同窓会幹事であるMs. Aneeta Thapagaが司会を務めた。

Java Prasad Acharyaネパール教育省開発援助調整部長からSSPは知識や文化をシェアするプラットフォームであり、今後もこれらのプログラムが続いていくことを期待していると締めくくった。

● 基調講演

最初に、Maharian Keshav Lal広島大学教授が講演した。教授自身の日本留学を含む学生時代、研究生生活の経験を通して、転換期での明確な目標設定、己を知りチャレンジを続けること等の自身の心構えを力強いメッセージで送り、視聴者を勇気づけた。

次に、Kathmandu UniversityのRijan Bhakta Kayashtha教授が登場した。名古屋大学在籍時の思い出と視聴者に対してのTipsを紹介。ホームシックになった経験なども踏まえ、日本文化を知る事の重要性とともに、日本での就学、研究、生活の秘けつ(Tips)としてBe Polite、教授を尊敬する(Not Be Punctual)などを体験談とともに紹介した。

● 日本に留学した同窓生からの発表

Shahさんは、東京大学とのプログラムに参加したときの経験を写真とともに紹介した。ネパール同窓会組織とJSTに深く感謝していると述べた。

Poudelさんは、早稲田大学のプログラムに参加したときの自信の経験を紹介し、新鮮で面白かったと感想を述べた。在日中、最先端のトイレ設備に感動したことや財布をなくしたときにそのままの状態を手元に戻ってきたことに感銘を受けたことなどの体験談を紹介した。最後に、JSTとその活動に深く感謝していると述べ締めくくった。

また、日本学生支援機構(JASSO)マレーシア事務所のRaymond Tanさんが、日本への留学について申請方法等豊富なデータをもとに有益な情報提供を行った。

最後に、Rajhandaryさんが各講演内容を的確かつ簡潔にまとめて感謝の意を表し、JSTの黒木慎一さくらサイエンスプログラム推進本部室長より、ネパール同窓会が今後自立的、自発的に活発に活動することを期待し、出来るだけの支援を行う旨述べて会を締めくくった。



Ambika JOSHI 臨時代理大使は、今年は外交交流70周年でもあり、ネパールにとって日本は重要なパートナーである。SSPは知識、経験などの交流に最適な場であると考慮しており、ネパールと日本の関係が今後も続いていくことを期待しているとの発言があった。

冒頭、JSTの岸輝雄さくらサイエンスプログラム推進本部長およびネパール同窓会代表として幹事長であるMr. Suman Dhun Shresthaより挨拶が行われ、ネパール同窓会の設立や第1回会合開催に至った経緯等が紹介された。続いて、菊田豊駐ネパール特命全権大使、Ambika JOSHI臨時代理大使、Java Prasad Acharyaネパール教育省開発援助調整部長からさくらサイエンスプログラム(SSP)と同窓会(SSCN)への期待を込めて激励の挨拶があった。

● 開会

豊田豊大使からはSSPのメンバーの自発的行動でネパール同窓会が発足したことを歓迎し、科学技術の人材交流が両国間でとても大事であることに触れられた。今年、ネパールから日本への留学開始120周年。今後、日本から送られたソメイヨシノの御礼として、熱海に贈呈されたヒマラヤさくらのように、交流の象徴として継続してほしいと述べた。